

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 29 日現在

機関番号：32517

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370244

研究課題名(和文) 福永武彦、その文学の生成と展開

研究課題名(英文) Fukunaga Takehiko, his life and development of his literature

研究代表者

近藤 圭一 (KONDO, Keiiti)

聖徳大学・文学部・准教授

研究者番号：60306454

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：私は2009年～2011年度の科学研究費助成事業「昭和文学の結節点としての福永武彦 - 古事記からヌーヴォロマンまで」で福永武彦の文学と生涯について多方面に亘って調査考察し、成果を公刊しましたが、今回の研究はその上に立って、近年発見せられた資料も利用しつつ研究を一層深め、未だ本格的な評伝がない福永の伝記的事項の調査にも当たったものです。

また、生誕100年を前に福永文学研究の現状とその可能性を確認するべく、研究者5名を招聘して研究懇談会を開催しました。

これらの研究成果をまとめた『年報・福永武彦の世界』第4号を2017年3月に刊行、研究者や文学館、研究機関等に配布して、研究成果を広布しました。

研究成果の概要(英文)：Through these studies I researched biographical data on the life of Fukunaga Takehiko whose serious biography has been yet to come. I studied also his several works including "Flowers of Grass (Kusa-no Hana)", on which I published a paper. Further more I held a roundtable with five scholars in order to exchange views and inquire his literature.

The results of these studies were published as "Le Cosmos de Fukunaga Takehiko; rapport annuel " N°4 in march 2017, which contains papers, record of the roundtable and also precious material such as an autography for novel plan, his letter to elder critic, works with his dedication and photographs he took.

研究分野：日本近代文学

キーワード：福永武彦

1. 研究開始当初の背景

本研究は、2009年度から2011年度にかけて行われた科学研究費助成事業「昭和文学の結節点としての福永武彦 古事記からヌーヴォロマンまで」(研究分担者：岩津航、西岡亜紀、山田兼士。課題番号21520201)を受け継ぐものです。

福永武彦の文学には、彼が後半生学習院大学仏文科の教授として研究対象にしたボードレールなどのフランス文学は勿論のこと、独・露・米など欧米文学からの幅広い影響が窺えます。一方で、彼は古典文学や漢籍の素養が深かったため、その流れの上に立った作品も残しています。さらに、絵画や音楽を大層愛好した福永は、文学作品の中にその要素を持ち込んでいます。福永武彦の文学にはこのように様々な要素が散りばめられており、その文学世界からは藝術的香気が立ち上ってきております。

しかし、前次の研究活動が開始せられた2009年頃は、残念なことにその研究は立ち遅れておりました。当時研究書は10冊にも満たず、その質も玉石混淆、論文発表も低調でした。また、詳しい評伝も用意されておられませんでした。その理由は、一つには余りに広範囲の影響関係を取り扱うために、それを丹念に考察することが容易ではなく、基礎的な研究が中々進められなかったためであり、また一つには自筆原稿や日記等の資料が公開されておらず、それどころか流出・散逸さえしていたためでもあります。そして、福永の創作世界を網羅し、それにきちんとした本文校訂を施した本格的な全集も刊行されておられませんでした。

けれども、前次の研究活動が進むにつれて、余り良好とはいえなかった研究環境が徐々に向上してきました。本格的な評伝や全集は残念ながら今に至るも刊行せられておりませんが、それでも日記や創作メモといった貴重な資料が発見され、そのうちのいくつかは公刊せられました。それらの資料の多くは北海道文学館に寄託されましたが、その北海道文学館では大々的な福永武彦展が開かれ、新発見の資料などが展示されました。また、有縁の方々による証言も公表され、その文学や作家本人を研究するための大変有益な資料になりました。

それらの進展の一定部分は私どもの研究成果によるものであることは申すまでもありませんが、今次の研究はそれを受け継ぎ、多方面に互る福永文学の要素に考察を加え、資料を整備するとともに、未だ詳らかではない伝記的事項を明らかにし、その豊穡な文学的世界の研究を一層多角的に進化させようとしてきました。

2. 研究の目的

前項で、福永にあっては欧米文学の要素と日本の古典や漢籍の影響と二つの要素が見られ、さらには絵画や美術を愛好して大きな

影響を受けたと述べましたが、これは福永のみならず近代文学の多くの作家たちに共通する事象であり、彼らにとってはこれらの要素を如何に消化して自分の血と肉とするかがその文学的営為にとって決定的に重要な課題でした。

しかし、福永は、キリスト者の家庭に生まれ、明治と大正の文学を読んで育ち、長じてからロートレアモンという当時としては最先端の詩の世界に魅了され、一方でボードレールの詩に魅了されてその創作の源泉とし、さらには芥川に影響を受け、仏文から多くを学び、自ら王朝物を物し、西洋の絵画や音楽に造詣が深かった堀辰雄との決定的な出会いを果たしたという経歴から、それらすべての流れを一層先鋭的に意識しなければなりません。そして大正7年生まれで真珠湾攻撃の9か月前に大学を卒業したという年齢、徴兵を受け戦争末期に帯広に疎開したという経歴から、必然的に軍国主義と戦争という暗い時代に直面せざるを得なかった体験を持っています。その意味で、福永武彦の文学には、日本の近代文学、もっと細かくいえば昭和文学、或いは戦後文学の殆ど全ての要素を指摘することができるでしょう。

本研究は、このように日本文学の古典から西洋文学の前衛までを視野に入れ、美術や音楽の要素まで取り込んで独自の作品世界を生み出した福永武彦という一人の作家を取り上げ、その作品を精査し、作家の伝記的事項を調査し、以てその本質を究明することを最終的な目的としますが、差し当たってはいまだ本格的な評伝がない福永の伝記的事実を調査し、そこから生み出された文学作品の研究を深化させることを当面の目標とします。

3. 研究の方法

今次の研究は研究分担者とともに4人で実施した前次の研究と異なり、小生一人で実施するものなので、上記「研究の目的」に記した通り、まず福永の伝記的事実を調査し、そこから生み出された文学作品の研究を深めることを主に研究を展開しました。

そのため、福岡、大野城、太宰府、二日市、帯広、軽井沢、富来といった福永のゆかりの場所を訪れて実地調査を敢行し、併せて交流があった方にインタビューを行いました。福永は大正8年生まれで、来年生誕百年を迎えますので、福永と縁があった方も既に高齢です。従って、この種の証言は時間との勝負で、今しかできないことです。現に前次研究以降福永ゆかりの方が何人も亡くなっています。この種の調査は、この科学研究費助成事業が終了した後も継続して実施していきます。

作品研究については、特に人口に膾炙している『草の花』を取り上げて、口頭発表を行った上で、論考を発表しました。此の論考については、10年以上前から考察を加えておりましたが、近年公開せられた資料等を援用する

ことで立論が強化されたところから、今回漸く形にしたものです。この他の作品についても考察を深め、近いうちに論集として一冊の研究書にまとめるべく準備します。

上にも述べたように、福永は来年生誕百年を迎えます。近年資料等が多数発見・刊行せられ、研究推進の機運が澎湃として湧き起こっている感がありますが、記念の年を前に学会等の学術団体でもシンポジウムなどが企画されているようです。今次研究では小生一個としては伝記的事項の調査と作品の研究を主に展開しましたが、一方ではそのような機運の中であって、他の研究者と連携し、相互の情報交換や問題意識の共有を図って関連する課題の認識を深める必要を認めました。それは小生が試みた研究の視野を広げ、延いては今次研究では手が回りきらなかった資料の現状や個々の作品の研究、或いは世界文学の中での位置づけや他の作家たちとの影響関係などについてさらに考察を深めることとなります。この目的の下に、飯島洋金沢大学准教授、岩津航金沢大学准教授、田口耕平北海道立帯広柏葉高校教諭、西岡亜紀立命館大学准教授、山田兼士大阪芸術大学教授といった有識者を招聘して座談会を催しました(下記〔その他〕口参照)。いずれも福永のみならず、その周辺にいた堀辰雄や中村真一郎、加藤周一、辻邦夫などの文学に高い見識を持つ研究者ですが、この座談会で福永文学の研究の現状を確認し、将来に向けてその可能性を検討することができました。この記録は後述の『年報・福永武彦の世界』第



4号に掲載しました。写真はその座談会の様子です。

以上の研究活動のうち形がまとまったものについては、最終年度が終了するのを機に報告書『年報・福永武彦の世界』第4号で公表しました(下記〔その他〕イ参照)。この『年報』は文学館、大学等の研究機関、図書館、出版社、報道機関、研究者など約400箇所配布する他、希望者にも贈呈しています。次項「研究成果」に述べる通り、今般の研究活動で研究水準を向上させたのはもちろんのこと、『年報』の公刊で成果を社会・国民に説明しなければならぬ科学研究費助成事業の要請に応えたものに

なっていると考えております。なお、この『年報』の第4号という号数は、前次研究で刊行した年次報告書からの通し番号です。

なお、この『年報』には下記〔その他〕八に記すように珍しい資料を掲載しています。精緻に編輯された全集を持たない福永にあっては、資料を調査することも大切な研究ですが、今次研究では座談会に参加して下さった方に提供して頂いた資料と小生の許に寄せられた資料の計4種を紹介し、その一部に解題を附しました。いずれも貴重なもので、今後の研究に欠かせないものになるだろうと予想されます。

4. 研究成果

上に述べた通り、今次研究では主に伝記的事項の調査と作品の研究に従事した他に、聞き取り調査や資料調査などを行い、座談会を開催、その成果を報告書『年報・福永武彦の世界』第4号で公表しました。これらの活動により以下の点に於て研究水準と研究環境が向上したものと思われま。

(1) 福永文学の中のいくつかの作品の研究を進めました。特に『草の花』について研究を深め、その成立の事情による新たな読解を呈示して、斬新な解釈を明らかにしました。

(2) 本格的な評伝がない福永の生涯について貴重な証言を得た他、何か所かの実地調査を刊行して、将来もし小生が評伝を執筆できるような環境に恵まれた場合の準備作業を行いました。

(3) 何人かの見識ある方の福永文学についての解釈を徴し、研究の参考資料に供する準備をしました。

(4) 研究者たちによって福永文学の現下の地平を明らかにして、その可能性について検討を加えました。

(5) 貴重な資料を何点も紹介しました。

(6) 各所に配布した『年報』によって、これらの研究成果が広く伝わり、研究環境の向上と研究の機運醸成に寄与しました。

(7) 本研究によって研究者相互の情報交換が進み、福永文学の魅力を伝播することができました。

(8) 反省点としては、力不足のために調査研究した結果のすべてを成果として公表することができなかったことです。来年の生誕百年を前に、もしどなたも評伝の類を書かないのであれば、これからの課題として小生が手を挙げたいものだし、そうでもなくとも研究論集を江湖に示したいと考えていますが、どちらにしても難儀な事業です。今後はこのどちらか、可能であれば両方を実現するべく研究を深めようと考えています。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

近藤圭一、『草の花』の成立を巡る一試論、年報・福永武彦の世界、査読無、第4

号、2017、53～63
飯島洋、福永武彦と辻邦生 幻視の系譜
、年報・福永武彦の世界、査読無、第4
号、2017、43～47
岩津航、世界文学としての福永武彦
フオンダーヌ、ヘダーヤト、ヴォルフと
ともに読む、年報・福永武彦の世界、
査読無、第4号、2017、48～52
田口耕平、福永武彦の帯広再訪 鷹津義
彦との再会、年報・福永武彦の世界、
査読無、第4号、2017、64～67
近藤圭一、書評「田口耕平著『草の花』
の成立 福永武彦の履歴」、週刊読書
人、査読無、第3091号、2015、5～5

〔学会発表〕(計 1 件)

近藤圭一、『草の花』の成立を巡って、
四季派学会 2014 年度春季大会、2014 年
7 月 23 日、大妻女子大学

〔その他〕

- イ 報告書『年報・福永武彦の世界』第 4 号、
(山田兼士編輯)、2017 年 3 月
- ロ 座談会「21 世紀の福永武彦を求めて」
参加者 近藤圭一・飯島洋・岩津航・
田口耕平・西岡亜紀・山田兼士
2017年2月4日、午後2時30分開始、午後
5時終了
会場 ホテルジュラク(東京都千代田
区)
- ハ 資料紹介及び解題
『死の島』目次案
《福永旧宅の玩草亭に所蔵されていた長
篇小説『死の島』の自筆目次案で、今
迄紹介されたことがなかったもの。》
中村光夫宛書簡
《昭和 21 年 1 月 21 日付けで、帯広から
差し出されたもの。所有者の好意で紹
介した。》
資料解題
《上記 の資料の解題を執筆した。》
加藤周一旧蔵・福永武彦関連本の紹介
《立命館大学に寄贈せられた加藤周一旧
蔵の福永武彦関連本の印影で、福永の
献辞が附された初版本などが紹介さ
れている。上記ロの座談会で言及され
ている。西岡亜紀氏提供》
福永武彦が撮った帯広
《昭和 43 年 5 月に福永が帯広を再訪し
た時に自ら撮った写真。かつて過ごし
た療養所や勤務した学校などが撮影
されている。田口耕平氏提供》

ニ ホームページ

<https://fukunagatakehiko.web.fc2.com/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

近藤 圭一 (KONDO, Keiiti)
聖徳大学・文学部・准教授

研究者番号：60306454

(2) 研究協力者

飯島 洋 (IIJIMA, Hiroshi)
岩津 航 (IWATSU, Ko)
田口 耕平 (TAGUCHI, Kohei)
西岡 亜紀 (NISHIOKA, Aki)
山田 兼士 (YAMADA, Kenji)